

1 題材 キラキラ言葉を考えよう

2 目標

自分たちが考えたキラキラ言葉を、自分の学級や他の学級で使うことで、評価を受け、新たなキラキラ言葉を考えることができる。

3 情報の交流を行う場面と期待される効果

考えたキラキラ言葉を他の学級の友達に使ってもらい、評価をしてもらう。その評価を基に、キラキラ言葉の修正・改訂を行っていく。他の学級の友達からの評価を受けることで、自分だけでは気付かなかった言葉の使い方を知ることができる。また、受け取った相手がどのように感じるかということも知ることができる。

4 実践の様子

本学級の子どもたちは、楽しく談笑する姿や友だちを遊びに誘って仲良くする姿を見かける。しかし、「あいつキモイ」や「めっちゃばかじゃん」、「かっこわるい」などと言って、相手に対して思いやりのない言葉（チクチク言葉）を平気で使っている。ここ数年、いじめの問題もニュースで多く取り上げられている。中学生も自殺をしてしまうほどにまでなっている。

まず、右の【資料1】のように、キラキラ言葉とチクチク言葉の言葉を情報として集め、場面ごとに整理した。【資料2】のように6つの場面に分けることができた。6つに分けた理由は、キラキラ言葉が極端に少ない場面であったからである。その場面ごとに、子どもたちは、キラキラ言葉を考えた。

考えたキラキラ言葉は、場面ごとにグループ分けを行い、一人一人場面に合ったキラキラ言葉を選択させ、キラキラ言葉カード【資料3】を活用し、場面と言葉を整理させた。このカードを用いて、使ってほしい場面・言葉を明確化し、他学級での実践を試みた。1週間後、アドバイスを受け取りに行った。すると、「使いづらかった」や「余計けんかになった」という評価があった。そこで、クラス全体でそのような評価を受けたキラキラ言葉を修正・改善することにした。その時に、右のようなマトリクス図【資料4】を用いた。修正しなければいけないことを視覚化できたことで、自分たちの言葉がどの位置にあるのかを把握することができた。また、この時、ある児童が、言葉を伝える際は、表情や伝え方も大切なのではないかということに気付いた。その結果、語尾を優しい言葉づかいにしたり、「笑顔で言ってね」など顔の表情まで付け加えることも大切であることに気付くことができた。

このように、他の評価を受け、自分のキラキラ言葉を修正・改善し、広げることにつなげていった。【資料5】

5 成果と課題

○ キラキラ言葉を修正・改善することで、相手を意識した新たなキラキラ言葉を作り出すことができた。

● 授業で修正・改善したキラキラ言葉を日常生活で用いるまでにはいたっていない。

| 資料1 |         |
|-----|---------|
| 4/3 | 「ババ」    |
| 4/4 | 「ババ」    |
| 4/5 | 「一番バカな」 |
| 4/6 | 「うざい」   |
| 4/7 | 「バカ」    |
| 4/8 | 「バカ」    |

1週間集めたクラスの言葉

- 資料2
- 勘違いをした場面
  - 授業中に答えを間違えた場面
  - 注意をしたのに言い返された場面
  - いきなり悪口をいわれた場面
  - 相手が嫌がることをしている場面
  - 一生懸命頑張っている場面

資料3

「だれでもさしよはまらうがえろ。」

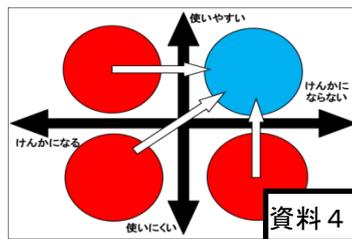
「答えをまちがえてしまった。」

「勝手にけんかになった。」

「勝手にけんかになった。」

「勝手にけんかになった。」

「勝手にけんかになった。」



資料5

「注意をしたのに言い返された。」

「その結果、うーん...という評価から、イね!という評価をもらった。」

「チャレンジ! キラキラ言葉を広めよう!」

「注意をしたのに言い返された。」

「そう言ったらOOが傷つくよ。」